

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有  
〒207-0015  
東京都東大和市中央 1-539-15  
http://www.yumuyu.com/  
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

# 東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料

## 第113号

毎月発行

発行 2021年(令和3年)10月16日 土曜日

2021年(令和3年)10月16日 土曜日

【当新聞発行責任者  
兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、68歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の崎上映会は延期。乗りこみで4作目制作に着手中。研究を深め、文化を発掘することを標榜。



## 政府案ではない「東北移住特区構想」

### いつまでも政府頼みでは人口減少に歯止めはかからない 特区実現スタッフも公募して移住させてはどうか

コロナ禍による大都市からの大規模な東北移住はなかった！

急速にしぼんできたコロナ禍はストレスまみれとなったこの国にはまことにありがたいことであるが、一方でとてものがっかりしたことがある。

それは、大都市圏、特に東京圏から地方への移住が大きく進むだろうとの予測がもの見事に大外れだったことである。

そして、もともと他地域よりも人口減少幅の大きい東北にもやはり移住者は来なかったのだ。

働き口はあっても、住みにくく、暮らしにくい大都市圏人口は、コロナ禍で促進されるリモートワークによって大きく減少するといふ予想があった。

しかし、大都市圏居住というものが強力な岩盤のように、コロナ禍でもビクともしなかったことが判明したのだ。

確かに、東京圏から若干

の移動があったのは事実だが、ほぼ広義の東京圏内の多少無理をすれば可能な通勤圏への移動にとどまったのだ。

### 東北への移住者増加はさらに強烈な手法必要

この現実を見るかぎり、東北への移住等による人口増加は尋常な手法では実現不可能ということが明らかとなったと断言できる。

東京一極集中という岩盤を切り崩すためには、大胆に発想を切り替えなければならぬ。

何が何でも人口を増やす、多少のあつれきを覚悟してでも人口を増やすという強烈な思いでその岩盤を切り崩していくほかないのである。

そうしないと、東北は加速的に人口が減り続ける。以前から、人がどんどん減り続ける場所には未来はないと、当新聞も再三にわたって主張してきた。「シャッター通り」というレベルを超えて、空き地

だらけとなったメインストリートを持つ東北のいなかな町や、過疎が進み過ぎて、わずかししか人の住まない地域に、好んで人が移住するものだろうか。

そうした場所にも移住する人はいると主張される方々には、一度そうした場所を訪れてみることをお勧めする。

### 「東北人口減少対策」はまだ見えない

さて、当新聞では、これまで何度も東北の人口減少問題を取り上げてきた。当新聞の呼びかけ効果はあまり期待できないのかもしれないが、この問題に対する東北自治体による画期的でまとまった解決策は、記者が知る限りにおいては、未だに見当たらない。

東北のどの自治体もこの問題を軽視しているとは思わないが、画期的な対策が

出てこないということは、結果的に人口減少を容認することと同じであり、まことに残念である。

このままでは、東北は「過疎」レベルをはるかに超えて、「誰も住んでいない地域」がどんどん増えていく道しか残されていないように思える。

### 政府頼みは止めにしてはどうか

そうなるのはならないのである。それには議論の余地はないのである。

これまで、全国の地方自治体は、国が打ち出す政策にすべて従ってきた。助成金が出るからである。

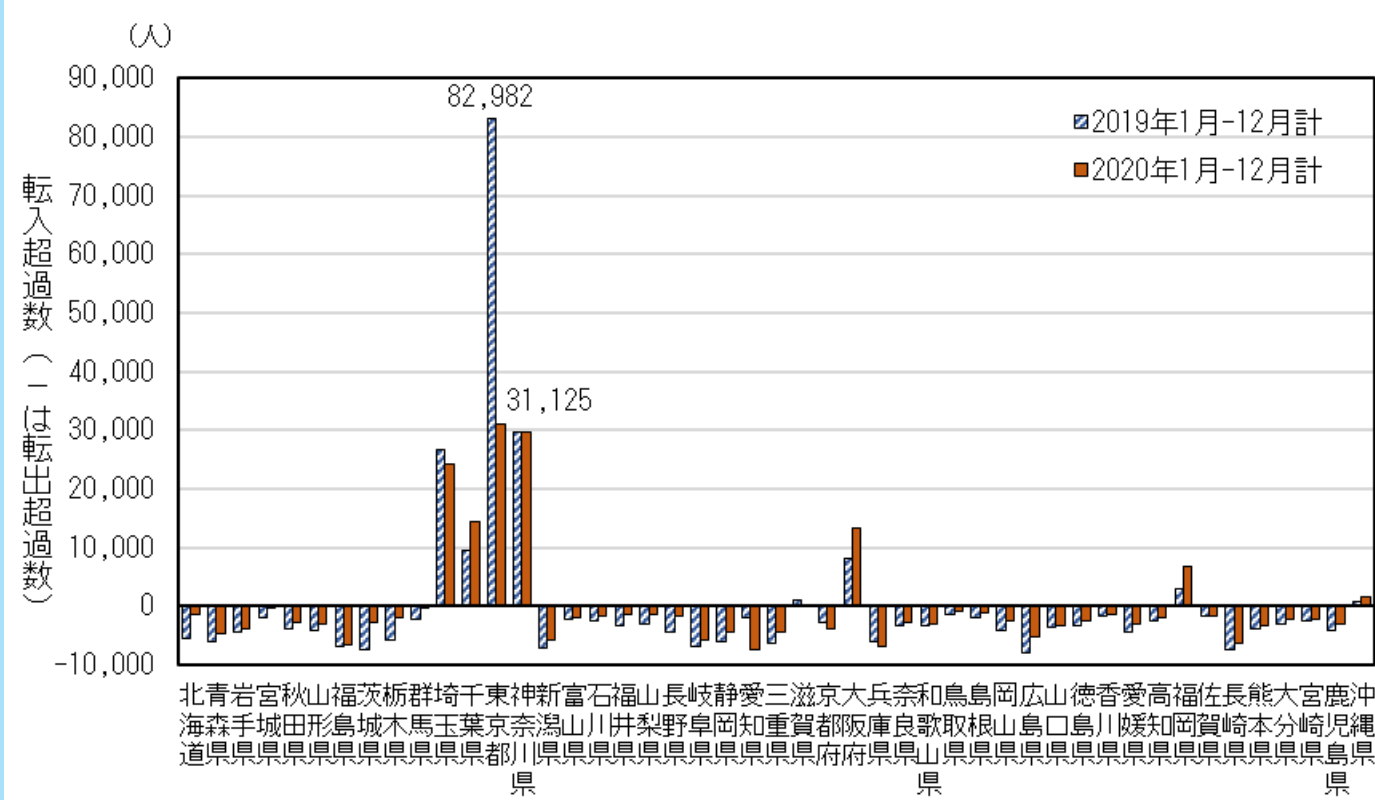
地方自治体の財政基盤は非常に脆弱であり、つまり大変な貧乏なのである。だから、背に腹は代えられないので、国に従うしかないのだ。

しかしその結果はどうだったであろう？

大都市圏を抱える都道府県を除く地方はますます人口が減少し、財政基盤もますます弱体化してきた。国の企画はもうとくに時代遅れなのではないか。そして、状況分析も間違っていたのではないか。それはおそらく真実だろう。

ならば、地方の各自治体は国の政策に従ってばかりはいられないのではないか。また、さまざまな助成金も、地方自治体の借金によるインフラ投資とセットであり、そのインフラ投資の

【都道府県別転入超過数(2019年、2020年)】・・・総務省統計局統計調査部国勢統計課による調査結果・・・これによれば、東北各県はコロナ禍中も「人口流出継続」だった一方、東京は転入が減少してはいるが、プラスを維持し続けている・・・期待されたコロナ禍による東北人口増の夢ははかなく打ち砕かれた！まことに残念ながら、尋常な手法では東北の人口増は望めないと言わざるをえない



借金返済は長く続き、地方自治体の財政基盤弱体化をさらに加速してきたのが事実ではないか。

利益が出るのは、インフラ建設を受注するゼネコンのみとは、まったく笑えない事実ではないか。

### 資金集めはクラウド等の民間資金

いまの時代、お金がないから何もできないというのは言い訳にしか思えない。

面白い企画ならば、クラウドファンディングでお金を集める時代なのだ。それを活用しない手はない。地方自治体も同じではないか。

また、最初から「巨額」を集めようとするからだめなのであり、企画を細分して、個々の面白い企画に分割すれば、お金が集まる確率は高いと思う。

要は「発想の切替え」であり、「他人頼み排除」であり、「国からの自立」である。

クラウドファンディングをよく知らない、「専門家」もいないというならば「解説書」を読めばいい。

さらに、資金調達ではクラウドファンディングに限定

することもない。

経済自由化が進化した時代であるから、工夫さえすれば、さまざまな資金調達手段がある。

要は、やる気と工夫である。情性と服従姿勢からは何も生まれない。

### 政府の地方創生特区は規制を際立たせたのみ

これから東北人口増大策

としての「東北移住特区構想」を提言するが、その前に、かつて政府が導入した「特区制度」との違いを指摘しておきたい。

鳴り物入りの政府の「特区制度」であったが、これはむしろ、「規制」というものが国中に網の目のように張り巡らされていることを浮かび上がらせただけというのが真実ではないのか。

またそれは、国の活性化を阻害する根幹の規制を解除するというよりも、比較的重要性の低い規制の解除をちらつかせて「やった感」を出したに過ぎないのではないか。

今回、当新聞が提言する「東北移住特区構想」はそうしたものはまったく異なる。

### 「東北移住特区構想」とは何か

そこで、唐突ではあるが、

当新聞は以下に「東北移住特区構想」を展開してみたいと思う。そして当構想が有効なのか、実現可能なのか、読者諸氏のご批判を賜

りたいと願う。

① 「特区」といっても国が以前打ち出した「特区」と異なり、東北の各地方自治体が独自に打ち出す「特区」であり、国の制度ではない。

② 「特区」は、法律で決める制度ではない。各自治体が打ち出す、「人口増加プロジェクト」のキャッチコピーである。

③ 東北各自治体が横並びで打ち出す構想ではなく、やりたいと考える自治体のみが自主的に打ち出す構想と位置づける。

④ 東北の各自治体を持つ環境、働く環境、自然環境等のメリットを活かしながら、移住のデメリットを最小限にするという「いいとこ取り」の構想である。

⑤ この「特区」は、東北の各自治体の既存住宅地から半ば独立した「移住者ならびに二重居住者のための特別居住区域」である。

⑥ そこでは、地域の慣習等から完全に自由であり、現住民から「過剰な干渉」を受けない「自治区」である。

⑦ 「特区」を設定する最大の理由は、移住者等が移住地の慣習を強制されるような空気を完全に排除するためである。

⑧ また、各自治体にすでに暮らしている人々と移住者の関係を「対等」にして、

いづれが優位かとの論議を最初から排除するために設

置する「特区」である

⑨ ただし、現住民との「交流」は阻害せず、むしろ促進する

⑩ 「特区」には最先端のIT環境を整備し、大都市圏への「リモートワーク」を可能にして、移住者が移住しやすくなるように、各自治体に地元での雇用確保の重責を軽減する

⑪ これらのプロジェクトに要する投資資金の大半は自治体の借金ではなく、プロジェクトに参画する民間業者による投資資金で組成する

### 移住からむ従来からの課題

東北でこれだけ人口減少が進んでも、他地域からの「移住に抵抗」を示す空気が強烈である。言いにくいことだが、これは東日本大震災ボランティアからも指摘されていたことである。

具体的には、「ボランティア作業で助けてもらうのはありがたいが、集落の運営に口をはさむのは許さない」、「ボランティア作業だけしてくれればいい」という強い被災地の意向であった。

住民のすべてを知る小さな集落であれば、ある意味で致し方ないのかもしれないが、いつまでもそうした「地元意識」、「よそもの排除意識」を振りかざして、「移住者」を上から見て、

あるいは「拒否」して、または「ここに住む者は、し

きたりや、慣習」を受け容れなければ住んではダメだとして「押し付け」をしていたのでは、移住者は逃げ出したくなる。

この問題を真正面から取り上げるのはなかなか勇気がいるが、人口減少を放置して「誰もいなくなる」よりは、多少のあつれきを生む方が良く判断する。

「外に開かれた自治体」がキャッチコピー

「おらが村意識」はさびれた地域特有のものだと決めつけよう。

人口が減れば減るほど、住民は頑なになって、移住者を排除したくなる傾向があるが、それは押しとどめよう。

その逆現象として、人口が増え続ける大都市圏では、「移住者」に対しては寛容しようとしたり、「しきたり」を強要しようとしたりすれば、そうする人の方が異常と思われるに違いない。

だから、大都市圏はだれも拒まない、だれでも移住できる。「慣習」や「しきたり」を強要されることもない。誰にでも開かれてい

だから、さびれた地方から大都市圏に流入してくるのだ。

筆者は地方出身者だから、この心理がよく理解できる。やはり、「外」に開かれた自治体」ことをキャッチコピーとして、「流れ」を作っていくことが重要だ

と考える。

東北のすばらしい環境を堪能し住みやすい移住地を堪能は両立する

と考える。

「外に開かれた自治体」がキャッチコピー

「おらが村意識」はさびれた地域特有のものだと決めつけよう。

人口が減れば減るほど、住民は頑なになって、移住者を排除したくなる傾向があるが、それは押しとどめよう。

その逆現象として、人口が増え続ける大都市圏では、「移住者」に対しては寛容しようとしたり、「しきたり」を強要しようとしたりすれば、そうする人の方が異常と思われるに違いない。

だから、大都市圏はだれも拒まない、だれでも移住できる。「慣習」や「しきたり」を強要されることもない。誰にでも開かれてい

だから、さびれた地方から大都市圏に流入してくるのだ。

筆者は地方出身者だから、この心理がよく理解できる。やはり、「外」に開かれた自治体」ことをキャッチコピーとして、「流れ」を作っていくことが重要だ

と考える。

東北のすばらしい環境を堪能し住みやすい移住地を堪能は両立する

と考える。

「外に開かれた自治体」がキャッチコピー

「おらが村意識」はさびれた地域特有のものだと決めつけよう。

人口が減れば減るほど、住民は頑なになって、移住者を排除したくなる傾向があるが、それは押しとどめよう。

その逆現象として、人口が増え続ける大都市圏では、「移住者」に対しては寛容しようとしたり、「しきたり」を強要しようとしたりすれば、そうする人の方が異常と思われるに違いない。

だから、大都市圏はだれも拒まない、だれでも移住できる。「慣習」や「しきたり」を強要されることもない。誰にでも開かれてい

だから、さびれた地方から大都市圏に流入してくるのだ。

筆者は地方出身者だから、この心理がよく理解できる。やはり、「外」に開かれた自治体」ことをキャッチコピーとして、「流れ」を作っていくことが重要だ

と考える。

東北のすばらしい環境を堪能し住みやすい移住地を堪能は両立する

とても、何一つ前進しないのならば、ふさわしい人材は非常に少ないと結論付けてもいいのではないか。

ならば、「特区構想」を打ち出す際に、こうした人材も「公募」してはどうか。そうした取り組みをする自治体があるということがニュースになれば、移住希望者も増えてきて一挙両得も狙える。

また、そうした人材は、各自治体の「プロジェクト要員」として「臨時枠」で雇用すればよい。

なかなか大変な任務であるが、地元民よりはやり

るが、地元民よりはやり

るが、地元民よりはやり

るが、地元民よりはやり

るが、地元民よりはやり

るが、地元民よりはやり

るが、地元民よりはやり

やすいであろう。

地元民はあちこちにしがらみがあり、身軽に動けないからだ。

「よそもの」は、そうしたしがらみなど気づかないふりして無視すればよい。「よそもの」にはそれが許されるだろう。

以前にもよく言われていたが、「よそもの」、「わかもの」、「ばかもん」に助け

てもらおうではないか。

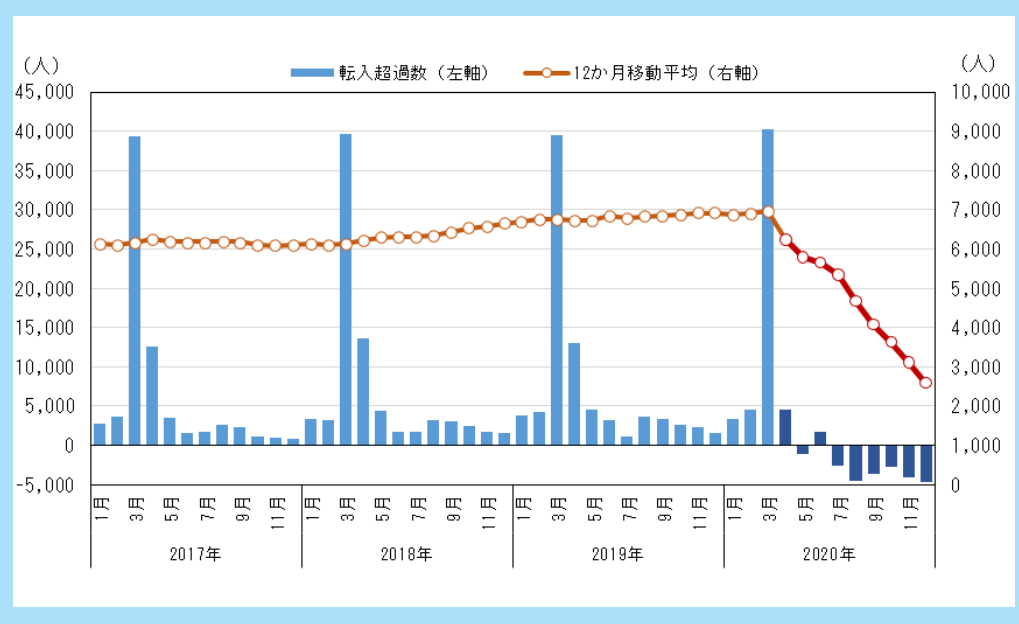
るが、地元民よりはやり

るが、地元民よりはやり

るが、地元民よりはやり

るが、地元民よりはやり

るが、地元民よりはやり





最近、夏日に近い暑さが出現したり、急に寒くなったりして季節感がないなあと感じていたら、もう10月も半ばなんですね。温かいものが恋しい季節がやってきていました。鍋もの、良いですね。

## 第86回

水産業再興のための  
料理レシピ紹介

### 《石狩鍋》

**—材料—** (材料4～5人) 生鮭 350g、キャベツ 250g、玉ねぎ 250g、にんじん 100g、油揚げ 1枚、じゃが芋 200g、舞茸 100g (1p)、生姜おろし 15g、塩・胡椒少々、サラダ油適量、水 1ℓ <調味料> 味噌 1大(2回に分けて入れる)、白だし大4、みりん大3、酒大3

**—料理方法—** ① 鮭を一口大にカットして、フライパンに油を敷いて、カリッとするまで焼く。一度フライパンから取り出す。② キャベツ、玉ネギ、にんじん、じゃが芋を乱切りにします。舞茸は、縦にちぎっておく。生姜はすりおろす。③ 野菜を油で炒める。(カサを減らす)よく炒めたら、水 1ℓをいれます。④ 煮いたら、おろし生姜、白だし、調味料、味噌 1/2 を入れ中火で20分程煮込む。後で、もう半分の味噌をいれます。⑤ 器に盛り、青みを散らし風味とコクにバターを乗せていただきます。



郷土料理愛好家  
松本由美子氏

首を長一くして、待ちに待った、2年近く延期中の「三陸酒海鮮会」はいよいよ再開近いかな？マスク付きでもいい、4人1セットでもいい、声出し制限でもいい！早くみなさんに会いたいです！そして美味しい東北地酒をみんなと酌み交わしたいです！



# 秋に美味しい 東北のビールの話

## 「クラフトビール」の盛り上がり

最近、ビールが大きいに盛り上がりつつある。いや、正確に言うと、発泡酒といわゆる第三のビールを含めたビール系飲料全体の売上は減っているのだが、その中で「クラフトビール」と呼ばれるビールだけは文字通り右肩上がりです。伸びているのである。

このクラフトビールとは何かについての確定的な定義はないのだが、概ね「大手のビール会社が造るビールとは異なる、小規模で職人が手作りするビール」というようなニュアンスで用いられることが多いように思われる。しかし、これすらそうだと断言することはできない。なぜならその「異なる」とされる大手のビール会社が今続々とクラフトビールを造り始めているからである。

そうなるまで定義のし直しが必要になるわけだが、要は、「これまでの画一的」と

も言えるスタイルのビールとは違う、個性的な特徴を持った多様な味わいのビール」と定義できるかもしれない。事実、私はビールほどの味の振れ幅の広いアルコール飲料はないと思っ

ものもあれば、逆に日本酒やワインと同等の一四、五パーセントのものもある。驚いたことに、最近では六〇パーセントを超えるものも造られているそうである。こうなるとうち、焼酎やウイスキーなどの蒸留酒とも渡り合える感じである。

実際にはビールには白く濁ったものや褐色のものや真つ黒いものもあり、味も苦いものだけでなく、甘みのあるもの、酸味があるもの、さらには塩気のあるものや辛いものまであるし、すっきりとした軽い味わいのものも、どっしりとした味わいのものもある。アルコール度数も、大手のビールは概ね五パーセント前後だが、二、三パーセントの

のか」と衝撃を受けたのが、私がビールを好きになったきっかけである。自分自身そうした体験をしているので、「ビールは苦手」という人にはその銀河高原ビールと同じスタイルのビールやフルーツを使ったビールなどを勧めてみたいという

## 「地ビール」は美味しくなかったか?

では、この時できた「地ビール」と、今盛り上がりつつある「クラフトビール」とは同じものなのか、それとも違うものなのだろうか。ビールの評論家と呼ばれる人の中には、別物と断言する人が少なからずいる。規制緩和で全国に雨後の筍のごとく誕生した「地ビール」は、当初こそ物珍しさもあってか大いに飲まれたが、その後、規制緩和の一環で一九九四年に酒税法が改正され、それまでは年間二〇〇キロリットル以上醸造しなければならず、事実上大手ビール会社の独占状態にあったビール醸造が、六〇キロリットル以上と引き下げられたことで新規参入ができるようになった。それを機に全国各地に新しいビール醸造所ができた。これらは地酒になぞらえて「地ビール」と呼ばれたが、そうした中で岩手県の山間部にできた銀河高原ビールを何かの機会に飲んでみて、それまでの大手のビールとは全く違うフルーティーで苦みの少ない味わいに「こんなビールもある

くなくなったころのビールも含めてどれも美味しいビールで、できればまた飲んでみたいと思うビールも多かった。地ビールが一時下降線を辿ったのは、そういう理由ではなく、当時はまだ消費者の認識が追いついておらず、ビール市場がそうした個性的なビールを受け入れるだけの成熟さがなかったというだけのことだったのだと思っ

り上がりは、アメリカの影響が大きい。そもそも「クラフトビール」という名前そのものがアメリカから来たものだが、そのアメリカでは、元々ビールの自家醸造が合法で、大手のビールの味に飽き足らないビール好きが自らビールを造る文化があったそうである。そうした中から本格的に事業としてビールづくりに取り組み醸造所ができていき、進取の気性に富むアメリカの人たちに受け入れられるようになった。アメリカのビールの代表と言え、言うまでもなく「パドワイザー」だが、二〇一三年にこの「キング・オブ・ビア」と呼ばれたパドワイザーのビールの販売数を全米のクラフトビール全部の販売数量が上回ったことで、アメリカのクラフトビールは俄然注目されるようになった。今やアメリカは世界中にクラフトビール文化を発信する地となっており、その影響がここ日本にも色濃く現れているわけである。

地ビールとクラフトビールの違いはここにあると言え、地ビールは当時「ビール大国」であったドイツやチェコをお手本にしたところがほとんどだった。一方、今のクラフトビールはこの「クラフトビール大国」アメリカを、両者は連続と

要は、そのビールが自分にとって美味しければ、それが地ビールと呼ばれようがクラフトビールと呼ばれようが、名前などどちらでもよいのである。

## 東北における「リアル地ビール」

こうしたクラフトビールの盛り上がりを受けて、ここ数年、東北にも新しいビール醸造所が続々と誕生している。そうして新たに醸造所を立ち上げる人たちに共通しているように見えるのが、「ビールを通じて自分たちの地域を盛り上げたい」という思いである。そうした思いもあるのだろう、地ビールの頃から続いていた醸造所も含めて、東北の地元の原材料を使って造るビールである。いちご、りんご、ぶどう、さくらんぼ、桃、ブルーベリー、カシス、ゆずといった果物はもちろん、米、大麦、小麦、トマト、そば、菊、ヤブツバキといった農作物、牡蠣、ほやといった海産物まで、豊富な東北の食材を活かしたオリジナルのビールが実にたくさんある。

今やクラフトビールという呼び方に押されて地ビールという呼び方は流行らなくなりつつあるが、私はこうした地元の原材料を使ったビールこそ改めて「地ビール」と呼びたい。地ビールと言われた頃の地ビールは、原材料のほとんどを輸入に頼ったものがほとんどだったが、今の地ビールは

まさに「リアル地ビール」である。以前にも書いたが、東北はビールの原材料のうち、香りづけや苦みづけに欠かせないホップの国内の生産量の実に九割以上のシェアを誇る一大産地である。まさに地の恵みである。このことと美味しいビールとの間にも大いなる関係がある。

ホップは収穫するとすぐ劣化してしまうので、通常は収穫後熱風を当てて乾燥させる処理を施す。一般的なビールはすべてこの工程を経たホップが使われるので品質は安定しているが、一方で熱を加えることで揮発してしまう成分もある。そこで、収穫したホップを生のまま、あるいはすぐ瞬間冷凍させて使うビールもある。「フレッシュホップ」と呼ばれるこうしたホップを使うためには、ホップ畑と醸造所が近接している必要がある。

東北に広大な契約ホップ畑を持つキリンビールなどはそのメリットを活かして、瞬間冷凍させた東北のホップを使って仙台工場で作る秋限定の「一番搾り」とれたてホップ」を毎年販売しているが、東北の地ビール醸造所もその地の利を活かしてこの時期、まさにとれたてのフレッシュホップのビールを相次いで出している。

まさに「リアル地ビール」である。以前にも書いたが、東北はビールの原材料のうち、香りづけや苦みづけに欠かせないホップの国内の生産量の実に九割以上のシェアを誇る一大産地である。まさに地の恵みである。このことと美味しいビールとの間にも大いなる関係がある。

## 今しか飲めない「フレッシュホップ」のビールをぜひ

そして何と言ってもビールに欠かせないホップのこともある。以前にも書いたが、東北はビールの原材料のうち、香りづけや苦みづけに欠かせないホップの国内の生産量の実に九割以上のシェアを誇る一大産地である。まさに地の恵みである。このことと美味しいビールとの間にも大いなる関係がある。

ホップは収穫するとすぐ劣化してしまうので、通常は収穫後熱風を当てて乾燥させる処理を施す。一般的なビールはすべてこの工程を経たホップが使われるので品質は安定しているが、一方で熱を加えることで揮発してしまう成分もある。そこで、収穫したホップを生のまま、あるいはすぐ瞬間冷凍させて使うビールもある。「フレッシュホップ」と呼ばれるこうしたホップを使うためには、ホップ畑と醸造所が近接している必要がある。

東北に広大な契約ホップ畑を持つキリンビールなどはそのメリットを活かして、瞬間冷凍させた東北のホップを使って仙台工場で作る秋限定の「一番搾り」とれたてホップ」を毎年販売しているが、東北の地ビール醸造所もその地の利を活かしてこの時期、まさにとれたてのフレッシュホップのビールを相次いで出している。

写真は福島県田村市に二〇二〇年にできた「ホップジャパン」のフレッシュホップのビールである。市内で栽培されたホップを何と収穫してから一時間以内に使って造ったという、これ以上ないフレッシュなホップのビールである。もちろん、ホップの香りがとても豊かである。しかも、ホップの品種だけが異なる二種のビールをリリースしており、飲み比べてみるとホップの違いがビールの味の違いに及ぼす影響がよく分かる。

ビール、と言うと暑い夏の飲み物、というイメージがあるかもしれない。しかし、こと美味しいビールという点で言えば、実は秋の今が最も狙い目である。このようにその年取れた原料で造られるビールが、出回る時期だからである。いわば、新米や新そばと同様、「実りの秋」はビールにも言えるのである。ぜひこの時期だけの東北の「新ビール」、味わってみていただきたい。



写真は福島県田村市に二〇二〇年にできた「ホップジャパン」のフレッシュホップのビールである。市内で栽培されたホップを何と収穫してから一時間以内に使って造ったという、これ以上ないフレッシュなホップのビールである。もちろん、ホップの香りがとても豊かである。しかも、ホップの品種だけが異なる二種のビールをリリースしており、飲み比べてみるとホップの違いがビールの味の違いに及ぼす影響がよく分かる。

ビール、と言うと暑い夏の飲み物、というイメージがあるかもしれない。しかし、こと美味しいビールという点で言えば、実は秋の今が最も狙い目である。このようにその年取れた原料で造られるビールが、出回る時期だからである。いわば、新米や新そばと同様、「実りの秋」はビールにも言えるのである。ぜひこの時期だけの東北の「新ビール」、味わってみていただきたい。

写真は福島県田村市に二〇二〇年にできた「ホップジャパン」のフレッシュホップのビールである。市内で栽培されたホップを何と収穫してから一時間以内に使って造ったという、これ以上ないフレッシュなホップのビールである。もちろん、ホップの香りがとても豊かである。しかも、ホップの品種だけが異なる二種のビールをリリースしており、飲み比べてみるとホップの違いがビールの味の違いに及ぼす影響がよく分かる。

ビール、と言うと暑い夏の飲み物、というイメージがあるかもしれない。しかし、こと美味しいビールという点で言えば、実は秋の今が最も狙い目である。このようにその年取れた原料で造られるビールが、出回る時期だからである。いわば、新米や新そばと同様、「実りの秋」はビールにも言えるのである。ぜひこの時期だけの東北の「新ビール」、味わってみていただきたい。

## 執筆者紹介

大友浩平 (おおともこうへい)  
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。  
「東北ブログ」  
http://blog.livedoor.jp/anagnasi/



Facebook  
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo

# 東北人が東北を「旅学」 するための旅ガイド本の事

宮城県気仙沼市を舞台にしたという、現在放映中のNHK朝の連続テレビ小説『おかえりモネ』は、どうにも評価が難しく、困る。今や伝説の感もある『あまちゃん』以来の東北舞台という事で割りと観ているのだが、あの時のような「破壊力」のあるドラマを期待すると、ひたすら平凡でつまらない脚本に思えてしまふ。二〇一一年の震災・津波において故郷・気仙沼に居合わせず、「何もできなかった」と苦悩し続けてきた少女が気象予報士となつて地元へ貢献しようとする、という話筋。しばしば重く、真面目すぎる印象があるが、役者はこごと



奥羽越後現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始める東北好きである。

発明される事もあるれば、この東北の中から立ち現れる事もあろう。

先日、我が散らかった部屋「大整理」の中でまた一冊の懐かしい書物に再会する機会があり、これがあらためて目を通すと、一種の「破壊力」に満ち、また独特の文法をも備えた一冊だなど感じたので、二〇年以上の時を越えてここに紹介してみようと思う。

＊

その書とは、『ひとり歩き』の東北」という、所謂旅行ガイド本である。発行年は、一九九六年。私がこれを購入したのは、山形県から東京に出てきて数年経ち、再び東北への興味が湧いてあらためて旅先にと考え始めた二十代半ばの頃だったと思う。それまでの青少年期、海外や東京ばかり目を向けていた私にとつて、おかしな話だが郷土東北はむしろほとんど未知未踏の世界だった。

「旅ガイド本」というものの全体の傾向は、その頃から現在までそう変わったものではない。風景や食といった、旅行における真っ先に興味を引く事柄を、できるだけ多くのカラー写真とともに紹介するし、しかし、小さなモノクロ写真を散りばめ、その反面詳細で情熱的な文章を満載したこの『ひとり歩き』シリーズは他とは明らかに異なっていた。

例えば前回の拙稿で私は、弘法大師・空海が讃岐国に連れてこられた毛人(蝦夷)の子孫であるという話に触れたが、実はその事実を最初に、あるいはごく初期に知ったのは『ひとり歩き』の四国「冒頭の「四国の基礎知識」という項目においてであった。つまり、このシリーズの四国編においては「四国とは、古代東国・東北人の移配地として少数派ながらも縄文の遺伝子が受け継がれている土地」である側面が重要な点として判断されたという事なのだ。

このような旅のガイドなど、普通はちよつと考えられない気がするのだが、こうした視点の投入によってこの土地の全く予想もしない多角的な顔を旅行者が発見できる可能性は間違いなく高まったはずである。一方の東北が、単なる旅行先に止まらず、既に当時から再移住の地となる可能性を見ていた私にとつて求めるべき旅のガイド本とは、まさにこのようなものであった。では、『ひとり歩き』シリーズの東北版とは一体どのような内容であったであろうか？

表紙を捲ると、東北地図の先に数行の序文がある。「いったん旅に出たら、ただ点と点を繋いで歩くだけでなく、その過程を楽しむ立ち止まってじっくり味わいたい。そのためには優れた『指南役』が必要だ。」そしてまず始めるのが、太宰・啄木・賢治を代表に

掲げた文学案内である。「東北といえば、暗い、寂しい、貧しい、寒いといった負のイメージがつきまとっていた。(中略)文学もまたどこなく哀感、哀愁をたたえたものが多くなる(中略)しかしそれはあくまでも表面的なものであり、その裏にはより強靱で、しただかたで、ニヒルで、そしてどこかユーモラスでさえある反骨が秘められている点を見逃す事はできない」次に、自然の風景を映し出し、詩的な解説を添える。「ブナの森は生命の森だ。(中略)何十年も何百年も同じ場所に立ち続けているが、年に一度ずつ生き返る権利を、神は与えている。」そして東北の基礎知識として、気合の入った歴史紹介が始まるのである。

「長く複雑な東北の歴史を限られた紙面に封じ込めることは難しい」と断つた上で、「この時代は、東北が西へと文化を及ぼしていた」と三内丸山遺跡を紹介。次に「有史時代に入っても東北は経済を来に頼らず、金・銅・鉄や馬をダイナミックに活用していた」として「部族連合」の形で独立した東北と、悪路王およびアテルイについて解説。続いて「田村麻呂に敗退して以来、東北の人々は忍従の時代に入ったが、俘囚と呼ばれる屈辱を表面上何食わぬ顔で耐えながら、再び力を蓄えていった」として奥州安倍氏から藤原氏へ連なる流れに突入するのである。

冒頭からこのような感じでもはや全編が東北に感情移入しまりなものでつきり東北出身者主導で書かれていたのかと思いきや、執筆者は松尾裕美という東京出身の、現在も旅や自然アウトドア関連で活躍する当時気鋭のフリーライターであった。となると、当シリーズのスタッフは相当のマニアか、度を越した勉強家という事なのだろうか。思い当たるのは、本書が執筆された時代背景である。九〇年代といえば、北海道のアイヌ民族関連でも現代のリアルな姿を写した図書が相次いで出版されるなど、国内において「東京・京都中心主義」や「単一民族意識」への疑問が様々な形で表面化した時期であった。東北では、九二年に高橋克彦による東北視点の長編小説『炎立つ』が世に出された他、同年山形市にこれも関東以北初の芸術系大学として画期的な東北芸術工科大学が開学、数年後に『東北学』を執筆する事になる民俗学者・赤坂憲雄が東京から赴任する。『ひとり歩き』の東北は明らかにこれら地方視点の新たなインパクトを強烈に受けた痕跡を感じさせるのである。本書執筆の原動力になったものは、おそらく今まではほとんど日本人の間で意識されてこなかった地方の、即ち日本全体の隠れ

ていた真実が明らかになる予感とともに、その実感が旅という現実の行動によって多くの人にもたらされるべきだという、少なくとも一部の旅行業界人の使命感だったのかも知れない。『ひとり歩き』の東北の本編は基本的に、他の旅行ガイドと同様に青森県から福島県まで、各県をつぶさに紹介していくが、序盤で「基礎知識」を叩き込まれているせいも、県単位という感覚が希薄で、「多様なから一つの東北」である事を実感させてくれる。各県に添えられたコラムも、『八甲田山の仙人たち(＊鹿内辰五郎、大町桂月の事)』『五能線の旅』『気仙大工集団とは?』といった活潑で、平泉の奇跡』に至っては、「土地から離れる事なく民族が平和的に独立する事は、現代の社会が抱える最も大きな問題だ。それを思う時、平泉が描いた夢の大きさに圧倒されるのである。」と締められ、単なる観光目的を超えて人生観を変えたい旅をこの地に指向するようでもある。

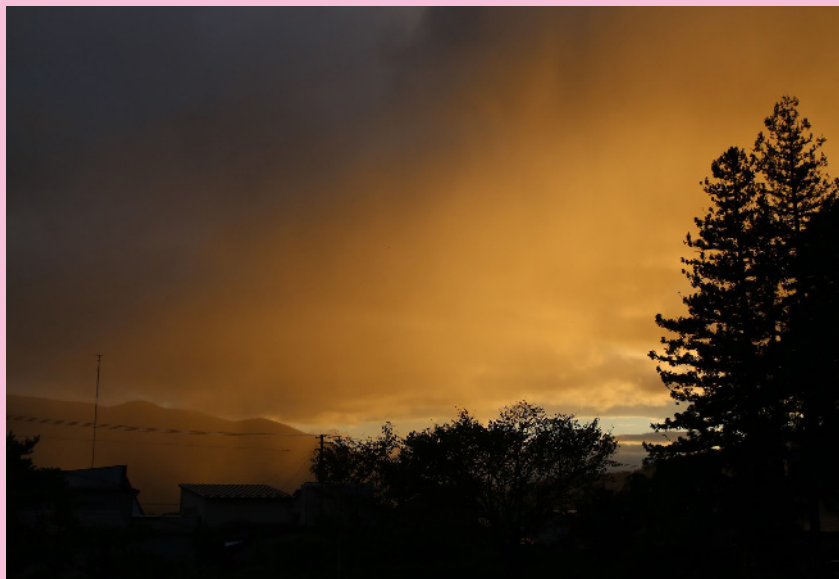
コラムといえば、過去の旅に関する前出の赤坂憲雄氏による記事を思い出す。氏が二〇〇三年に東海大学出版『望星』へ寄せた「大人の旅人とは誰か」(現在、荒蝦夷出版『いま、地域から』に収録)というエッセーである。東京と東北を常に行き来し、各地のフィールドワークを生業とする氏にとつて「旅のガイド本」だが、そのレベルが軒並み低い事を嘆き、今時の大人の旅人らがこの程度の代物で満足するとも思わぬかと怒りを露わにしている。その大人の旅人らとは、今や書店に充実した地方に関する図書の数々を手に取り既に多少を学んでいる。「その先を求めろ」人々の事である。氏は予言する「彼らは早晩旅のガイド本に背を向けるだろう、と否、既に時代はカーナビやスマートフォン普及によって旅人らにガイド本の存在すら忘れ去らせようとしているのかも知れないのだが・・・」本文で注目すべきは、往年の民俗学者・宮本常一が提唱したという「旅学」なる名の学問の存在である。「観光学」とも対立するといふこの概念は、むしろ「東北学」の伴侶ともいふべきもので、定住という現生人類の常識とされる生き方そのものを問う革新的視点・思想であり、特に東北という地から為されるべき挑戦としての視線となつているかも知れない。即ち観光学のように旅



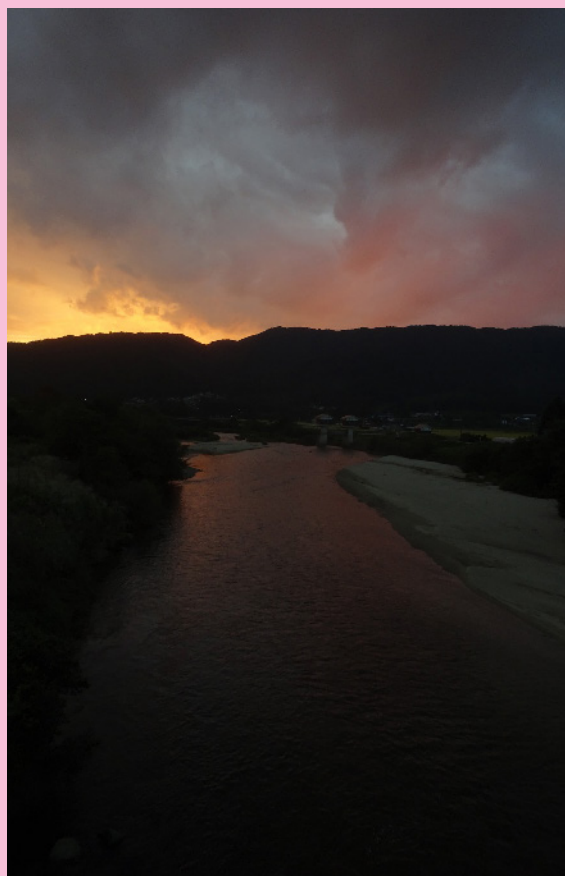
一見旅行ガイドらしくない『ひとり歩き』の東北(JTB)の中身



月の出



染まる夕暮れ



夕暮れ時



山の神舞い

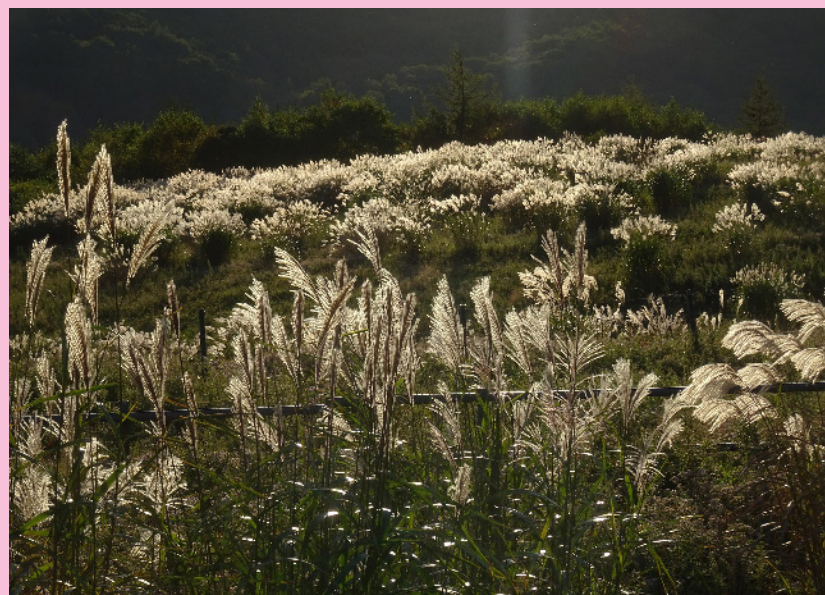


夜神楽 三番叟

シリーズ  
遠野の自然  
「遠野の寒露」  
遠野 1000 景より

あれだけ大騒ぎしたコロナ禍が急速にしぼんできた。あつげにとられるほどの大変化で、かつての騒ぎが何だったのだろうと肩透かしをくらった気分だ。とはいえ、少し前までは自粛の嵐だった。その影響で全国的にお祭りもイベントも軒並み中止となった。ここしばらくおじやましていない遠野まつりであるが、今年も中止となった。まことに残念なことである。しかし、筆者が大好きな夜神楽は開催された模様である。やはり神楽は夜見るに限る。

夜の闇を背景として浮かび上がる神楽は、どこか異界へいざなわれるようで幻想的だ。見たかったなあ。



野辺のススキ



権現舞



恵比寿舞

# シリーズ【東北の災害の歴史】 第4回

## 寺田寅彦に学ぶ・・・科学は進歩したのに『被害』が大きくなる理由 今から90年前に書かれた随筆のなかでその「答え」を提示していた



寺田寅彦

科学が進歩したというが、自然災害は一向に減らない。また、科学の進歩とともに、自然災害は次々に防止できるはずだった。自然災害を防止するための巨額の研究費もつぎ込み、多くの研究者が長年研究してきた。

の思いはずっと消えない。進歩思想に毒された現代の人間の思い上がりのせいなのかと反省したりもした。でも、それだけなのか。あれ以来、ずっとこのことを考えてきた。

先日、「災害を考える」(NHKテキスト)を求めて読んでいたら、上記の答えのようなものが見つかった。「寺田寅彦：『天災と日本人』という文章だった。以下、傾聴すべきその文章をそのまま抜粋する。

ここで一つ考えなければならぬことで、しかもいつも忘れがちな重大な事項がある。それは、文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその激烈の度を増すという事実である。(『天災と国防』)

そうして、重力に逆らい、風圧水力に抗するような色々の造物を作った。そうしてあつぱれ自然の暴威を封じ込めたつもりになっていると、どうかした拍子に檻を破った猛獣の大群のように、自然が暴れ出して高樓を倒壊せしめ堤防を崩壊させて人命を危うくし財産を亡ぼす。その災禍を起こさせた

もとの起りは天然に反抗する人間の細工であると言つても不当ではないはずである。(『天災と国防』)

文明が進むほど天災による損害の程度も累進する傾向があるという事実を十分に自覚して、そうして平生からそれに対する防御策を講じなければならぬはずなのに、それがいつころにできていないのはどういふわけであるか。その主なる原因は、畢竟そういう天災が稀にしか起こらないで、ちよつと人間が前車の覆轍を忘れたころにそろそろ後車を引き出すようなことになるからであろう。(『天災と国防』)

その時には、今度の津波を調べた役人、学者、新聞記者はたいがい故人となつてゐるか、さもなくとも世間からは引退してゐる。三十七年と云へばたいして長くも聞こえないが、(中略)その間に(中略)平和な浜辺の平均水準に近い波打ち際を照らすのである。津浪に懲りて、はじめは高いところだけに住居を移していても、五年たち、十年たち、十五年二十年とたつ間には、やはりいつともなく低いところを求めて人口は移つていくであろう。そして運命の(中略)終わりの日が忍びやかに近づくのである。(『津浪と人間』)

昔は「地を相する」という術があつたが明治大正の間にこの術が見失われてしまったようである。颱風もなければ烈震もない西歐の文明を継承することによつて、同時に颱風も地震も消失するかのような錯覚に捕らわれたのではないかと思われらるるに綺麗に颱風



防潮堤を軽々と超えた津波・・・田老町



田老町の被害



新たな防潮堤工事

自然の神秘とその威力を知ることが深ければ深いほど人間は自然に対して従順になり、自然に逆らう代わり自然を師として学び、自然自身の太古以来の経験が我が物として自然の環境に適應するよう努めるであろう。前にも述べた通り大自然は慈母であると同時に厳父である。厳父の慈愛に服することは慈母の慈愛に甘えるのと同等に吾々の生活の安寧を保証するために必要なことである。(『日本人の自然感』)

自然の十分な恩恵を甘受すると同時に自然に対する反逆を断念し、自然に順応するための経験的知識を集積し蓄積することにつとめて来た。この民族的な智慧も一種のワイスハイトであり学問である。しかし、分析的な科学とは類型を異にした学問である。(『日本人の自然感』(注：ワイスハイトは知恵を意味するドイツ語))

まるで今の時代に生きてゐるかのような「警告」であり、慈愛深い指摘である。これらの文章に触れたとき、前述の疑問、憤りなどがすっと消えていくように感じられた。



写真で  
お伝えする  
東北の風景

写真撮影  
尾崎匠

【岩手の  
幕しし】

